

中に、養和二年（一一八二）二月、義仲が砺波郡の武士藤原定直を越中石黒莊弘瀬村下司職に任命したという記事がある。また北陸宮が越中国宮崎に迎えられ、宮崎一族の保護を受けたということも、義仲の北陸道経略の重大布石の一つであろう。そのほか、史料にあらわれない幾多の政治工作が行われていたことであろう。藤原定直の下司職任命や北陸宮下向のことは、俱利伽羅合戦の一か年前のことである。

二、砺波山の合戦

平氏の大軍進發 寿永二年（一一八三）四月、飢饉の年あけを待って、平氏は総力をあげ、一〇万の大軍を編成して、義仲追討のために北陸道めざして進發した。平氏軍の傘下に集まった者は、山陽・山陰・

四国・九州の西国武士が主であった。もっと詳しくいうと、東海道は遠江より以东は不参加。東山道は近江・美濃・飛騨だけ参加。北陸道は若狭のみ参加して、越前以东は不参加というありさまであった。平氏軍一〇万の大將軍は、平維盛（重盛の嫡子）を総帥として、通盛・経正・忠度・知度・清房ら六名であり、侍大將には越中国にゆかりのある越中前司盛俊・越中次郎兵衛盛嗣をはじめとして二十余名があり、寿永二年四月十七日、第一陣が都を進發した（『平

語』卷七、北国下向『源平盛衰』記』卷二十八、源氏追討使の事）。

其勢十万余騎、大將軍六人、むねとの侍二十余人には過ぎざりけり、先陣後陣定むる事もなく、思々に我先にと進みけり、十万余騎の軍勢を聳て、^{（從カ）}洛中を被出ければ、異国をばしらず、日本我朝に取ては何なる者か手向をすべき、源氏等なまじあなる事し出て、今度こそ跡形もなく滅むする、穴ゆゆしの事ぞやとそ、京中の人申ける^{（延慶本）}。

見かけは威風堂々たる大軍団で、源氏は跡形もなく粉碎されるだろうと評判されたが、「先陣後陣定むる事もなく、思ひ思ひに我先にと進みけり」という言葉に、指揮統率のばらばらな、烏合の衆であったことを表明しており、

やがて起るべき大敗北を予想せしめるのである。

平氏軍は往路の費用を途中で勝手に徴発することを経容されたので、逢坂の関からはじまって、途中通過する莊園や公領からの貢租や官物を徴収し、一般人民の物に対しても掠奪を重ねた。幾万という軍兵・軍馬が通過するには数十日もかかるものであるから、沿道の人民の難儀は言語に絶し、逃散するものもみられた。

燧城合戦

これより先、義仲はやがて押し寄せ来るべき平氏の大軍にそなえて、自らは信濃にありながら、部下を派遣して越前国に燧城（ひうちが火打が城）を築かせた。部下というも、主力は越前・加賀・越中の新参兵であった。いま福井県南条郡今庄町（北陸本線今庄駅）の日野川の岸に燧という村がある。四方を高山に囲まれた天然の要害である。木曽方の兵はその一角に城を築き、燧城と称した。城の前に流れていた日野川をせきとめて人造湖を作った。やがて平氏の先鋒がおしよせたが、大湖水にはばまれて攻撃できず、対岸に宿営していたずらに日を送っていた。この城を守る武士は、越前では平泉寺長吏・齊明威儀師・稲津新介・齊藤太など、加賀では林六郎・光明・富樫入道・仏誓など、能登では土田・武部など、越中では宮崎・石黒・入善・佐美などであり、総勢六千余騎であった（この人名は『平家物語』流布本による）。

しかるに、齊明威儀師が突然裏ぎりをして、人工湖の秘密を平氏勢に通報したので、人工湖の水は切って落とされ、忽ち城は陥ち、源氏勢は加賀国へ落ちのびた。

こうして五月二日、平氏軍は勢いに乗じて加賀国へ乱入した。源氏勢は安宅（あたか）の渡りに城郭を急造して防いだ、多勢に無勢、間もなく攻め落とされた。林氏・富樫氏の根拠地たる二城も焼き払われた。今や北国一帯には平家の大軍に対して、抵抗できるものは何もないように見えた。

般若野の合戦

そこで源氏方は、越後国府（直江津）に駐屯する義仲に早馬をたて、至急救援隊を送れと催促した。義仲は今井四郎兼平に命じて、六、〇〇〇騎を与えて越中国に進発させた。今井軍は親不知を過ぎ、黒部四十八箇瀬を渡って、婦負郡呉羽山に陣をとった。

平氏は、越中の事情に明るく、かつ剛勇無双の越中前司盛俊に、五、〇〇〇騎を引率させて、越中に進撃させた。盛俊は俱利伽羅山を越えて、小矢部河原を渡り、般若野に陣をとった。

五月九日午前六時、源氏六、〇〇〇騎と平氏五、〇〇〇騎とは、般若野で大会戦に及んだ。片や強剛の信濃武士、片や勇猛越中前司のひきいる精鋭部隊、火の出るような激戦をくりかえしたが、午後に入っても勝負がつかず、夕方に及んで平氏は小矢部河原まで後退し、夜に入って俱利伽羅峠をこえて加賀国へ帰った。この時平氏軍の損害は二、〇〇〇騎に及び、本隊へ帰着したのは三、〇〇〇騎であった（『源平盛衰記』（卷二十九））。

般若野合戦のことは、『平家物語』流布本・長門本に載せず、『源平盛衰記』には詳しく記し、延慶本には簡単に記してあるが般若野の地名は記さない。もしこのことが事実ならば、朝六時から夕方に及ぶ当時としては珍しい長時間の戦闘であった。

両軍の対峙

平氏は一〇万の大軍を大手、搦手（かちう）の二手に分けた。大手は砺波山（俱利伽羅山）に向かうもので、三位中将維盛を大將軍とし、七万騎と称した。その軍列は俱利伽羅から津幡を越えて森本までつづいた。搦手は能登の志雄山（志保山）に向かうもので、大將軍は越前三位平通盛、三河守平知盛であり、三万騎と称した。

これを聞いて義仲は、本隊を率いて越後国府を進発し、越中国府（伏木）に入った。熾城・安宅の合戦に敗北した加越能の武士達は、こんどこそ名誉を挽回せんものと、続々として義仲の陣に馳せ参じた。その顔ぶれは、越前では、本庄・樋口・斎藤の一族、加賀では林・富樫・井上・津播多（つばた）、能登では土田・関・日置、越中では野尻・河上・石

黒・宮崎等であった（この人名は『源平盛衰記』による）。

倶利伽羅谷
追落とし作戦

この時義仲は、太夫房覚明を招いて、白山大権現に戦勝祈願の願文を書かせ、これを白山に奉

納させた。

義仲は国府より南下して、般若野の御河端につき、ここで軍議を開いた。そして、「平家は多勢であり、味方は無勢である。多勢と無勢では、平地の会戦では無勢が不利であるから、敵が平地へ降りてこないうちに三方より敵を包囲し、倶利伽羅山の山中の深谷へ追い落とそう。」という作戦を決定した。『源平盛衰記』によれば、その包囲作戦のために、軍を次のように七手に分けた。

(一)源行家 志雄山（搦手）一万騎

(二)根井小弥太 南黒坂 二、〇〇〇騎 案内者蟹谷三郎

(三)今井兼平 日宮林 二、〇〇〇騎 案内者石黒太郎光弘・高楯二

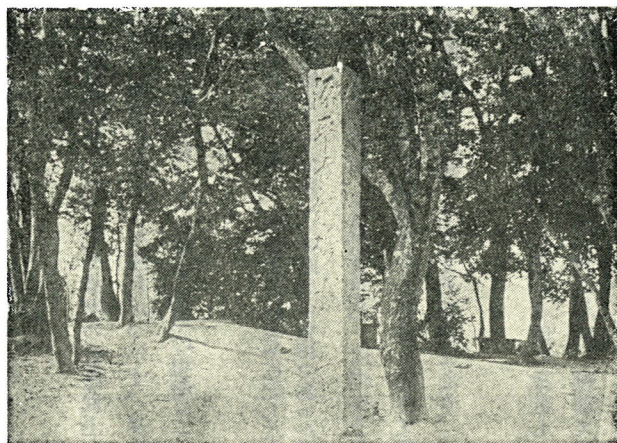
郎光延

(四)樋口兼光 富田・竹橋 三、〇〇〇騎 案内者林・富樫

(五)余田次郎 北黒坂 三、〇〇〇騎 案内者宮崎太郎・向田荒次郎

(六)巴（義仲妾）鷺岳 一、〇〇〇騎 案内者水巻四郎・同小太郎

(七)源義仲 埴生・柳原 三万騎（本隊）



倶利伽羅古戦場の碑

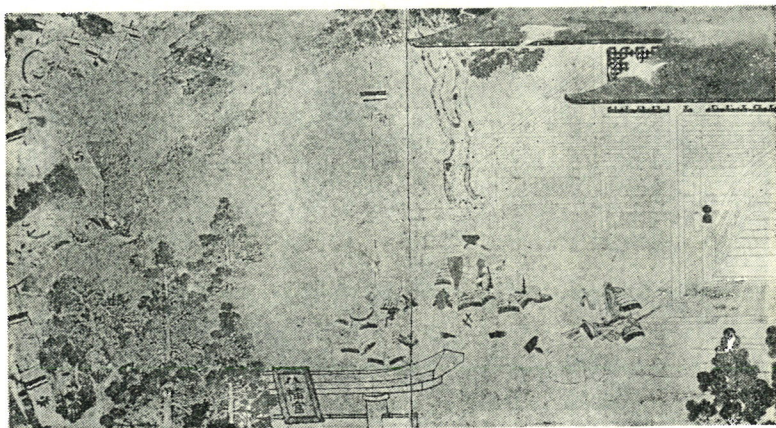
（小矢部市埴生）

義仲は三万余騎をひきいて埴生庄に陣を取った。四方を見まわすと、夏山の緑の森の間から神社が見えた。名を聞くと八幡宮であり、この埴生庄は石清水八幡宮の御領であるという。八幡宮は源氏の氏神である。義仲は幸先よしとて大いに悦び、太夫房覚明に命じて戦勝祈願の願文を書かせ、神前に奉納した。

さて義仲は、本隊をひきいて平氏軍の正面に陣地を取り、平氏軍を牽制して俱利伽羅山から下りないようにあしらいながら日の暮れるのを待つ。樋口兼光は二、〇〇〇騎をひきいて、北方を大迂回して竹の橋方面に出て、敵の背後にまわる。余田次郎は三、〇〇〇騎をひきいて、北黒坂にまわり、敵の北側面を衝く。本隊の南には今井兼平の二、〇〇〇騎、巴の一、〇〇〇騎、根井小弥太の二、〇〇〇騎が、それぞれ展開して、敵の目を東正面にひきつけておく。こうして三方より敵を包囲し、南の一方深谷を明けておき、敵をこの深谷へ追い落とそうという作戦であった。

平氏の大敗

こうして五月十一日の夜半となった。源氏は三方より完全に包囲し、三方より一せいに太鼓を打ち、法螺貝^{ほら}を吹き、ときの声をあげて、平氏軍に総攻撃をしかけた。



義仲の願文奉納の図

(石川県津幡町 俱利伽羅神社蔵)

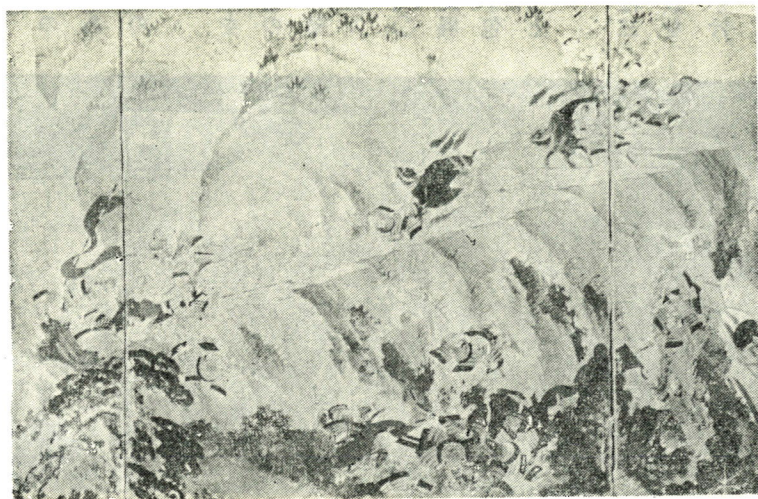
長途の行軍に疲労して熟睡していた平氏軍は、この奇襲におどろき、周章狼狽し、たった一か所、敵軍のいない南の深谷（地獄谷）へ、雪崩（なだれ）をうって落ちこみ、人馬とも圧死した。

もちろん平氏の大軍のすべてが、この地獄谷へ落ちこんで、圧死したわけではない。大將軍維盛・通盛をはじめとして、二千余騎が加賀国へ逃げのびた。また戦場まで到着せず、津幡・森本・金沢あたりで待機していた後方予備隊も多くいた。

一方、能登国志雄峠へ向かった平氏軍は、すこぶる優勢で、源行家のひきいる源氏勢を打破り、源氏は総退却をしていた。義仲は砺波山では大勝利を得たが、行家の向かった志雄山方面が心もとないので、精鋭の人馬二万余騎を選抜して、氷見の湊を打ち渡り、志雄山方面へ応援に向かった。行つて見ると案の定、行家の軍は打破られて退却していたので、義仲は新手の二万余騎をもって平氏軍に突入し、たちまちこれを撃破した。平氏は大將軍知度（清盛の末子）を討たれ、侍共は多く亡んだ。

追 撃 戦

砺波山および志雄山で大勝利を得た義仲軍は、やがて追撃戦にうつる。六月一日には源氏軍は平氏軍の防衛する安宅・篠原（現在加賀市）に迫っ



図の戦の牛火 (石川県津幡町 俱利伽羅神社蔵)

た。ここでも源平の激戦が展開されたが、平氏軍は又もや敗北し、越前国に逃げ去った。

こうして平氏勢は、連戦連敗して止むるところを知らず、慘澹たる有様にて京へ帰った。

木曾義仲が破竹の勢いで進撃し、平氏に完勝した理由の一つは、白山及び比叡山の後援があった為といわれる。白山はそのころ宗教勢力においても軍事勢力においても、北陸随一であったし、比叡山の威勢は後白河法皇をして歎息させるほどであった。この両勢力は義仲の上洛作戦の要衝をおさえており、これらを味方にひき入れることに、義仲は苦心の謀計をめぐらしている。『源平盛衰記』や『平家物語』長門本には、般若野の戦のあった五月九日、越中の六動寺の国府に進出した義仲は、覚明に願文を起草させて、白山妙理権現（加賀の白山寺・越前の平泉寺の僧兵集団の本尊）に進めたと記されている。（この記事、『平家物語』流布本になし）

六月上旬、越前の国府（武生^{たけふ}）に着いた義仲は、比叡山工作を案じ、覚明に命じて牒状^{やうじょう}を書かせ、六月十日これを発送した。山門（比叡山）では、木曾に味方すべきか、平氏に味方すべきか、大評定をしたが、遂に木曾に味方することに決して、返牒した。こうして義仲の山門工作は大成功し、上洛作戦の大道はひろびろと開けたのである。

平家物語・源平盛衰記の信憑性

以上、木曾義仲の挙兵より俱利伽羅合戦の前後までを、越中関係に重点をおいて略述してきた。その史料には主として『平家物語』と『源平盛衰記』を使った。しかしこの両書には、軍記物語にありがちな虚構・粉飾・誇張・錯誤が含まれており、そのまま信用することができないところも少なくない。次に、その数点を指摘しておきたい。また、若干の補注を付記したいと思う。

盛衰記の矛盾

『盛衰記』に重複・矛盾が多いことは、菅茶山の『筆のすさび』以来、先学の屢々指摘されてきたところであるが、北国関係記事をみただけでも、次の諸点が発見される。

○平知度が志雄山方面の大將軍であると記しておきながら、俱利伽羅合戦の条には、夜襲戦の翌朝、源氏と戦って自害したと記

す。その上、加賀国篠原合戦の後で、並松付近で矢十二本射られて討死したと記す。二度討死したことになる。

。志雄山方面の侍大将武蔵三郎左衛門有国は、右の篠原、並松の合戦で、平知度に殉じて自害したと記し、のちに壇の浦合戦の条には、権中納言知盛、平中納言教盛の同伴をして自害したと記す。これも二度の自害である。

平家物語と源平盛衰記の相違
『平家物語』の流布本は語り物的性質のため文章は流麗で簡潔である。『盛衰記』や延慶本・長門本は一般に詳細であり、流布本にない記事が多く含まれている。

。有名な俱利伽羅合戦における「火牛の計」は、『盛衰記』にあるけれども流布本・延慶本にはない。長門本では、火打城合戦の後、富樫・林が自家の城にたてこもった時に、平氏がいくら攻めても落ちないので、斉明威儀師の謀によって、火牛の計を用い、以て二城を陥れたと記している。そして俱利伽羅ではこの戦法を使用していない。つまり火牛の計は話を面白くするために付け加えられた挿話に過ぎないと思われる。火牛の計のタネは中国の昔、斉の將軍田單の用いた戦術であり、『史記』列伝の田單伝に記すところである。

。『盛衰記』に記載があつて流布本に記さない記事はすこぶる多いが、その数例を次に示す。(一)般若野合戦。(二)白山妙理大権現への願書。(三)義仲の妾巴が晩年越中に来り、石黒氏をたよって尼になった話。(四)燧城合戦のあとで加賀国安宅の渡りの合戦を記し、越中の水巻四郎父子や石黒太郎兄弟の奮戦のことを記す。(五)俱利伽羅夜襲の翌朝の太見七郎光能の奮戦の話。(六)長門本に、燧城合戦のあとの安宅の渡りの合戦において、宮崎太郎が越中前司盛俊の剛弓に射られて瀕死の重傷を負い、目だけわずかに動くのを郎党共がかついで郷里へ帰り、医療につとめたところ二十日ほどして治癒し、俱利伽羅合戦に参加した話が載っているが、他の本には見えない。

。俱利伽羅山における源氏の各部隊長の氏名が各書によって区々であることは既述したが、平家軍の大將軍・侍大将の名も大いに相違する。(○印は共通、・印は逆のもの)

平家物語	流布本	源平盛衰記
俱利伽羅方面	- 三位中将維盛 - 越前三位通盛 - 越中前司盛俊	- 三位中将維盛 - 左馬頭行盛 - 薩摩守忠度 - 上総判官忠綱 - 河内判官季国 - 高橋判官長綱 - 越中権頭範高
ほか		

志雄山方面

・薩摩守忠度
○三河守知度
武蔵三郎左衛門
はか

・越前三位通盛・三河守知度
・越中前司盛俊、上総守忠清
飛騨守景家

平氏軍十萬騎について

俱利伽羅合戦における平氏の軍勢十萬騎、源氏の軍勢五萬騎というのは、誇張であつて、俱利伽羅地域の地理的狀況や、また騎馬行軍の体型などを勘案してみれば、實際は三分の二、五分の一くらいであつたと考えたい。なお『玉葉』寿永二年六月五日条には、平氏の軍勢は四万余騎と記されている。

俱利伽羅峠について

昔の官道と今の国道八号線とは道筋が全く異なる。今の国道は天田峠を通るが、これは明治以後新たに開鑿されたもので、昭和四十二年には天田峠の直下に長大なる（九五八呎）トンネルがうがたれた。昔の北陸道は、今の国道八号線より南方一、二里はなれている。その順路は、石動町―埴生―石坂―俱利伽羅峠―俱利伽羅村―森山―竹橋―津幡となる。俱利伽羅峠は越中と加賀の境にあり、古来ここに手向神社と長楽寺があつた。長楽寺は俱利伽羅不動明王を祀つた古刹であつたが、明治維新後廃寺となつた。戦後、由緒ある不動明王を再興する運動がおこり、昭和二十四年新たに不動寺が創建され、衆庶の信仰をあつめている。手向神社は峠の神をまつり、今も昔のままに俱利伽羅村の村民によつて祭祀されている。峠の頂上猿が馬場には「源平古戦場」と彫つた石柱が建つている。山麓の石坂村の西端に巴塚と葵塚とがある。二人とも義仲の愛妾であり、かつ部将であつたと『平家物語』『盛衰記』に記されている。

志雄山について

志雄山（志保山）は氷見市と石川県羽咋郡志雄町との境界をなす山地である。その峠路は白ヶ峰峠と呼ばれ、その街道は志雄往来または志雄路（『萬葉集』に出る）といい、古来能登と越中とを結ぶ重要路線であつた。

大伴家持はこの峠を越えて能登へ出陣の旅に赴き、源平の合戦にも、承久の役にも、南北朝の合戦にも、この峠付近で戦闘が行われた。近世には御上 使往来に指定せられ、また氷見地方の物産を金沢方面へ送る重要街道でもあつた。この旧道は氷見町―小久米―床鍋―白ヶ峰峠―深谷―下石―志雄町を経由したが、明治以後は廃道となり、その北方に新道（小久米―日名田―三尾―走入―向瀬―志雄町）が開通した。なお『平家物語』流布本に、義仲が志雄山の戦に平氏を撃破した後、能州小田中の新王の塚の前に陣を取つたと記するのは、地理を知らぬことから起つた誤りである。小田中は志雄町より一二里北方にあり、加賀方面

とは反対方向である。また延慶本の志雄山合戦の条に、「木曾社浪山の軍に打勝て、五万騎の勢にて志雄坂へ馳向て、安高の湊を渡さむとするに、はしをひかれて河は深し云々」とあるのは誤りで、志雄と安高とは関係なく、流布本に記すごとく、「安高の湊」は「ひゞの湊」（氷見の湊）と書くべきである。「氷見の湊」を、熱田本には「氷見湊」とし、屋代本には「越中国日比湊」と記している。『盛衰記』の北国所々合戦の条に、「越中前司盛俊が一党五千余騎、安宅の渡に押寄せ見れば、橋板は引きたり、水は深し云々」とあり、これと混同したものであろう。そのかわり『盛衰記』には、ひゞの湊の記事は載せていない。

三、義仲の入京と没落

義仲の入京

義仲は平氏軍を追撃して、寿永二年（一一八三）七月二十八日に入京し、比叡山延暦寺との交渉提携を得て平氏追討の大願を果たした。俱利伽羅合戦よりわずかに二か月後の入京である。

義仲は入京後、先にも述べたように後継天子に北陸宮を推挙したが、後白河法皇や廷臣たちに反対されて実現を見なかった。これによって法皇と義仲との間に埋めがたい溝が生じた。

寿永二年の宣旨

義仲は入京以後、前年来の大飢饉の影響で、部下の大兵団の兵糧の調達に苦しんだ。そのため義仲の部下の軍兵は、京都の内外で掠奪と乱暴をくりかえし、人心を失った。その上、義仲は武力を背景にして政治に容喙したので（後継天子問題はその最たるもの）、法皇や貴族から嫌われるに至った。法皇は義仲を忌避し、関東にある源頼朝に好意を示し、彼によって時局を收拾せんとした。法皇は都から義仲を追いつ策として、西国にある平氏を追討することを命じた。義仲は留守中のことに不安を感じていたが、度々の院宣により、重い腰をあげて出陣し、九月二十日、備前（岡山県東部）に入った。しかし、先発していた彼の部下は、閏十月一日、備中（岡山県西部）の水島において、平氏軍と海上戦を行い、水軍にすぐれた平氏軍のために惨敗した。折しも京にいた源行家に謀反の疑いがあるとの報いに接し、義仲は平氏追討を中止して帰洛した。